

カラミのり

三 鮮

カラチの女

椎名麟三

講談社



カラチの女

著者の了解により校印を廃します

昭和三十八年九月三十日第一刷発行 定価三四〇円

著者 椎名麟三

発行者 野間省一／東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 豊国印刷株式会社／東京都文京区大塚坂下町一一四 《大製製本》

発行所 株式会社・講談社／東京都文京区音羽町三ノ一九／振替東京三九三〇

電話東京九四二一一一一（大代表）

落丁本・乱丁本はおとりかえします

©椎名麟三 一九六三

発表誌

カラチの女	小説新潮	37・4
群衆のなかの顔	群像	37・10
私生児	文芸春秋	37・10
事件の根拠	文芸	38・1
行き違い	新潮	38・4
悲壮な痙攣	文学界	38・7
盗作	新潮	38・8

目次

カラチの女	3
群衆のなかの顔	27
私生児	43
事件の根拠	71
行き違い	127
悲壮な痙攣	167
盗作	209

装幀 岩本正雄

カラチの女

私が関西の私鉄の車掌をしていたころである。乗務員詰所では、他愛のない噂がひろがるときがあった。たとえば金持の娘が婿をさがしているといったような話だ。彼女は美人であり気立てもやさしく、話を聞いただけで、私たちのみじめな生活をいやという程思い知らせてくれるのである。全くそんな女なんか、私たち交通労働者には、縁のない存在だからだ。しかし全然のぞみがないかといえば、そうではないというところに、このような噂がある熱心さをもつて語られる所以があるのだ。つまりその金持の美しい娘は、婿になってくれる男がいさえすれば、「誰でもいい」というわけなのだ。つまり私たちでさえもその気になりさえすれば、婿になることができるかも知れないというのである。しかしこの点から話はうまくなくなる。つまりいままでも何人もその娘の婿となったが、三日もたたない間にみんな逃げ出してしまったとか、いままでも五人も六人もその婿をとったが、どういうわけか、いい合せたように半年もたたないうちにみんな死んでしまうというような事情がくっついてくるのだ。この事情の前にさす

の私たちもたじろがずにはいられない。とにかくこの事情というものは、私たちにあやしげな、何か非人間的なものを感じさせるからである。私たちは、その事情についてのおたがいの洞察やら想像を授け合い、そして最後には笑い話にしてしまう。しかも私たちは、仲間の誰かがそんな話にのって婿入りしたというようなことは聞いたことがなかったのである。しかし忘れたころになって噂となつてひろがるこの種の話は、たとえ誰かがいい出した冗談にしろ、私たち交通労働者のおかれているいささか絶望的な状態だけは正確に照らし出してくれたのであった。

だが、そのときの話だけは、私たちにとつてのぞみがありそうだった。話の出所もはっきりしていた。乗務員詰所の近くにある林田屋という小さな軽飲食店の主婦だった。その店では、私たち乗務員は、伝票で食つたり飲んだりすることができるので。むろん給料日にはつらい思いをしなければならぬのは当然である。主人は無口な働き者で店の掃除ばかりしていたが、こんな店では料理のできない彼には用はなく、毎日麻雀屋へ追いやられている状態だった。福原でちょっとした料理屋をやっていたのだが、弟の借金の証文に判を押したとかで、その店を失わなければならなかったようだった。しかし主人はそんなことを口に出したりなんかしなかった。主婦の愚痴から私たちに知れていたのだ。主婦は、五十すぎのやせた背の高い女で、どうも胃が弱いらしかった。だが、せまい、昼でも電燈のついている暗い料理場いつでも立働いていた。しかしとにもかくにもその店のやつて行けたのは娘のおかげなのだ。二十ぐらいの小柄な女で、私たちは彼女が胸を病むか失恋でもするかを願っていたものだ。というのは少々

勝気で、私たち乗務員には手におえそうもなかったからである。しかも残念なことに美人なのだ。それはとにかく、主婦のもたらした話というのはこうだった。主婦の父方のいとこが、インドのカラチで（むろんカラチは現在、キスタン領である）、雑貨商として成功しているが、その末娘は内地の男と結婚させて、内地へおきたいというのであった。しかも持参金は、私たちの想像を絶していた。一万円というのである。現在では一万円は何でもないだろう。しかしその金額の大きさを実感しようとして、私たちの日給への換算に熱中しすぎ、あのバッテリー型の電車から振り落されそうになった車掌があつたくらいなのだ。バッテリーというのは運転手も車掌も吹きさらしになるあのドアのない古い型の電車なのだ。むろん私も下宿の二階でこっそり計算した。そして私の日給の八千三百日分、つまり年数では二十三年分だということがわかった。当時の私の日給は、一円二十銭だったからである。当然詰所はときならぬ恐慌が起った。私たち乗務員は、古参の運転手や車掌をのぞいてひとり者が多かったからである。

私の仲間でもそれが早速問題となった。当時私は、非法法の共産党の細胞を組織していて、そのキャップをやっていたのだが、資金に窮していた。だからその女には何の興味もなかったが、その持参金には興味があまりすぎた。私は、細胞で議題としてとりあげる前に事実かどうか調査しなければならぬと考へた。私は、兼村という車掌とまるで秘密な冒険にでも出かけるように、林田屋へ行った。娘の貴美子は、近所の商店主へビールの酌をしてやっていた。私たちは、彼女を無視してせまい料理場へ入り込んだ。主婦は、漆喰の床から生えたひよろ長い黒なきのこのようにつつ立っていた。話を聞くと、主婦は白い歯を見せて妙なしなをつくつ

た。しかしその白い歯は入れ歯なのだ。それでも彼女は、きさくに奥へ上って横長の角封筒をもつて来て、私たちにわたすと、上り口に腰を下した。そのとき主人が入って来たが、私の手にしている角封筒を見ると、ちょっと暗い顔をしながら、主婦のそばをすり抜けて奥へ消えて行った。どうも主人には、このような騒ぎは氣に入らないようだった。封筒には差出人の外国の所書きが書いてあったが、インディアという英字しか読めなかった。しかし外国の郵便切手のはってあるだけで私は満足していた。問題は場所ではなく、金だったからである。私は、主婦に断わりもなく封筒から手紙を出した。実に読みにくい下手な字であるのが私を失望させたが、しかし読みにくい下手な字の方が事柄の真実性を裏付けるのかも知れないと思い直した。だが、その長い手紙は（用箋に五枚もあるのだ）、ほとんど意味のない言葉がならべ立ててあるのだ。もう三十年ばかり奈良を見ていないが、三笠山にはまだ鹿はいるのかとたずねているのかと思うと、その次の文章には昨日印度人の召使が、九谷焼の皿を割ったという日常的な出来事の叙述がつづき、次には一転してボンベイへ行ったときの見聞記になるというふうなのだ。その全体の印象は、あまりあてにもしていない親戚へ退屈のあまり手紙を書いているような感じだった。そのなかに私たちの騒ぎをまき起している文章がまぎれ込んでいるのだ。だから私は、ほとんどのところでその文章を見落すところだった。そこにはたしかに、ほんの三行ばかりだったが、

「血のつながっている子供の一人を日本の故郷へおきたいので、同封した写真の末娘を神戸の誰かと結婚させたいと思っている。一万円ぐらい金をもたせてやるつもりだが、適当な

人がいたら知らせてくれ」という意味のことが書いてあったのである。

「申し込むには、履歴書と写真がいるんやろな」と兼村は思案した顔で呟いた。

私は、同封されていた見合写真とでもいうべきものを見ていた。素人でもとったらしい小さな写真で、日本の着物を着て石燈籠の傍に立っていたが（きつと庭を日本風にこしらえてあるのだろう）、拡大鏡のたすけでも借りなければ、目鼻立ちがはっきりしないほど、人物は小さいのだ。だが、むろんそんなことは私に何の興味もなかった。私は、それを兼村へわたした。兼村は、それを見ながら、不思議そうな声でいった。

「やはり女にちがいあらへんな」

私は、主婦へ実的な質問を開始した。

「お婆はんがお婿はんを推薦しはるんか？」

主婦は、入り口に腰を下していても、ひよろ長い黒いきのこのようだった。どうやら髪のとその身体付がその私の連想に影響をあたえているらしかった。しかし主婦は、そんな私の思いを知るはずもなかった。彼女はまた白い義歯をあらわに出した愛想笑いをしながら（この主婦は全く気がいいのだ）、いささかとまどった声でいった。

「どないしたらええやろと思つてまんねん。ゆうて来てはる人が多うて……」

「そやろな」と兼村は感嘆した。

だが、私は、はなはだ実的な人間なのである。だから感嘆してなどいられなかった。私は、すぐさまたずねていた。

「多いて、何十人？」

「まだ三人でっけど」

「それじゃ多くない」

「そやけど……」と彼女は急に自信のない声になった。

私は、その彼女を追及した。

「この柳川という人は、おぼはんのほかにも手紙を出してたのんでいるんやあらへんか？」

「そんなことあらへん」と彼女は威厳でも損じたように急いでいった、「あの人の親戚ゆうたら、日本にはわてひとりしかおらへんのやもん。そやけど何せ三十年あまりもおうてへんし、カラチゆうたら何やえらい遠いところやいうし……向うの様子も意向もはっきりわからへんのやし……」

そのとき兼村が別の興味を示していった。

「もう申し込んでいる三人いうのん、誰や？」

「坂部はんに……鴨川はん、本山はんでっけど」

「みんなあかん。失格や。坂部は花柳病ばっかし患っているやつやし、鴨川も詰所へ高利貸からの赤い字で印刷した督促状が毎月来てるし、本山は事故起してから、頭がちょっとおかしいさかいな」

主婦は、がっかりした様子になっていった。

「そうやな」

兼村がその主婦をなぐさめた。

「お婆はん、心配せんでもええわ。わいらがお婆はんの得心の行くええ候補者をさがしてやるよつてに」

私たちは料理場を出た。店には、商店主風の客が場ちがいの感じで相変らず一人でビールをのんでいた。その相手になっていた貴美子が、腰を下したまま命令するように兼村へいったのである。

「兼村はん、吉田はんに会うたら、早よう先月分の払い^{はらい}払うてとゆうといて！」

だが、十数日後、私は、街頭細胞でもあり上部機関でもある男から（彼はいつも栄養不良の感じてくたびれた背広を着ていた）、その金を獲得するようにという指令を受取ったのである。むろん私が、その前の連絡のとき話したからだが、しかし冗談話のように話をしたのだ。

あるいはその指令は、上部機関の決議を経たものではなく、彼ひとりの考えから出たものであったのかも知れない。しかしそれはやはり指令であったのだ。そして私は、残念なことに指令には絶対服従しなければならないと信じていたのである。たとえそれが私には荒唐無稽な指令に見えても、上部機関には私なんかのうかがい知ることのできない重要な意味があるかも知れなかったからだ。

私は、その月の私の下宿でひらいた細胞会議に議題の一つとして提出した。数人いた仲間たちは笑った。私は憤然としていった。

「指令やんか？」

人々は一層笑った。私と一緒に調査に行った兼村までもである。私は、かまわずに議事をすすめた。誰が花婿候補者として適任かということについてだ。だが議事は難航した。私たちは、これまでにこの種のあやしげな花嫁の話には、相当訓練されすぎていた。だから議題としての値打ちすら認めてくれないばかりか、きつとその女はろくろ首にちがいないとか、夜になるとあんだんの油をなめる女だろうというような、自覚的な労働者としては（黨員である以上そうであるわけなのだ）、あつてはならない前近代的な想像までがとび出して来て収拾がつかなくなったのである。結局議題としてとりあげることに對して賛否をきめることになったが、反対の者は、というところほとんど全部が嬉しそうに勢よく手をあげる始末なのだ。ほとんど全部というのは、兼村だけが調査に行った責任を感じたのか、迷ったようにそれでも手をあげていたからだ。私は、いささか孤独を感じた。全く指令は絶対のはずなのだ。私は、そのことをさうに力説した。結局、最後の決は、私へ一任ということになった。他のことは知らず、こんなことが一任ですまし得るものではなかったはずなのである。

2

私は、仕方なく翌日こっそり林田屋の主婦へ会いに行ったのである。いざとなると、どうしてかはずかしい気がしたからだ。私が、日給四日分以上にあたる金五円也の紙包みを手数料として差し出すと、主婦はびっくりした顔でいった。

「あんたは、ほんまにええ人やな」

私は、ひどくじめな気がした。それでも私は、主婦へ念を押した。

「このこと、みんなにだまってるや」

それから私は、手紙の角封筒を自分で買って来たり、それへ宛先を下駄な英字で書いてやり、手紙を入れればいいだけにしてやったりした。私は、あの上部の男の指令が、私ひとりにあてたものとして解釈すればいいと自分で自分で弁解していたのだ。そして私は、それを自分では手落ちなく遂行したのである。後は、全く先方の意向まかせなのだ。主婦がどんな手紙を書いて郵便局へもって行くつもりか知らないが、それ以上は私の如何ともすることのできない事柄なのだった。

主婦は、カラチへ手紙を出した。しかしそのことを聞いたのは詰所においてなのだ。林田屋の娘の方がばらしてしまったのだ。むろん手紙の内容をもだ。先約の三人と同じように私も知らわれた。しかし私は、気にもとめないふりをしてこう答えた。

「気まぐれにやったんや」

しかし他の坂部や鴨川や本山は、面白半分やとか冗談やとかいつて答えていた。しかしこの方が、私たちにはある真実性があつた。なるほど私たちは世界地図をひろげて、カラチが架空の土地ではなくこの世界にちゃんと実在することをたしかめていたし、日本の商社もそこにあるだろうし、航路も何本もそこに寄っているのだ。しかも現にカラチから林田屋の主婦へ手紙が来ているではないか。——だが、当時の私たちにはカラチは遠いというより遠すぎたのである。この遠すぎる距離が、この結婚話を非現実的なものに感じさせたのだ。しかももう一つ遠